

新春特別コラム
「真空管アンプに人生を賭ける男」
A & M 株式会社 三浦 篤 氏
編集委員 森 芳久

毎年世界各地で催されているオーディオ関連のショー、CD が登場し最も活気を帯びていた 1980 年代から比べれば少なくなったとはいえ、まだまだ世界各国の多くで毎月のように開催されている。その主なショーのほとんどに毎回顔を出し、日本人の出展者としては最も有名な人物がいる。

その人こそ今回ご紹介するエイ・アンド・エム (A & M) 株式会社の創業者三浦 篤(みうら あつし)氏である。真空管アンプ一筋に 60 年余、文字通り人生を賭けて取り組み、世界中にそのファンは多い。事実、ショー会場の A & M のブースではいつも商品に見入る観客と三浦氏を取り囲む人の数が拮抗している。それらのオーディオファンと楽しそうに談笑している氏の姿は、誰をも拒まずしかし威厳に満ちた良きオーディオ指導者の風格が漂っている。

さて、その三浦氏が何故オーディオの道に足を踏み入れたのか。

昔、三浦氏にそのお話を伺ったとき、その切っ掛けが偶然であったとの答えに少しびっくりしたのを憶えている。昨年秋、三浦氏と東京インターナショナルオーディオショー会場でお話をする機会を得たので、「新春特別コラム」として氏のオーディオ人生について簡単にご紹介したい。



2017年東京インターナショナルオーディオショーでのA & Mブースにて

三浦 篤氏は1934年3月13日長野県岡谷市で生を受け、高校まで長野で過ごし関西学院大学に進学する。戦前、中日ドラゴンズの捕手として活躍した三浦 敏一(みうら としかず)選手を叔父に持つ篤少年としては、当然のように幼いときから野球に夢中であった。しかし、大学では卓球部に入部、そこで先輩で卓球部のマネージャーだった錦水電気工業株式会社創立者の子息早川 齊(はやかわ ひとし)氏と親交を深めることになる。これが縁となり1956年関西学院大学卒業と同時に早川氏に請われて錦水電気工業株式会社に入社することになった。

早川 齊氏はいち早くオーディオの世界に音楽性とデザイン性を取り入れたことでも知られ、1961年に名器と言われた6BQ5 プッシュプル・プリメインアンプ SQ-5A、SQ-5B を発売、1963年には6RA8 プッシュプル・プリメインアンプを発売し、LUX (錦水電気オーディオブランド)の名を不動のものとし、その後ラックスの社長となったオーディオ界の逸材である。

これらの美しいデザインのケースとシャーシーなどの部品集めに奔走したのが三浦氏であった。当時、浅野 勇(あさの いさむ)、岡原 勝(おかはら まさる)などのオーディオ評論家が「アンプの音は回路図を眺めれば判る」と明言され、オーディオ誌の製品紹介にはアンプの回路図とその解説が載せられていた時代である。そこにいち早く部品や製品のデザイン性を重視したLUXの商品戦略、同時に音楽に密接した音作りはオーディオファンのみならず多くの音楽ファンを魅了した。見事な戦略であった。

こうしてLUXのアンプは群を抜く存在となり、三浦氏は営業で忙しく日本全国を飛び回る毎日であった。当然ながら氏は真空管アンプ、またオーディオの楽しさに目覚めた。当時のオーディオ専門店のうるさい社長や店長、ユーザーなどとの直接の交流から、ユーザーがオーディオに何を求めているのか肌身で感じることができた。

やがて三浦氏は1963年より米国マーケット開拓を任されることになる。ここで、マランツの創業者ソウル・マランツ氏、マッキントッシュのゴードン・ガウ氏、H.H.スコットの創業者で真空管アンプ設計の天才といわれたハーモン・ホスマー・スコット氏などオーディオ界のレジェンド達と親交を結ぶことになる。氏は彼らとの付き合いを通じて益々真空管(球)の持つ可能性とその魅力の虜になっていく。そして、彼らの製品をつぶさに見て、ユーザーを裏切らないモノを作り続けることの大切さ、同時に会社また組織のリーダーには人としての魅力が最も必要だということも学んだ。

1982年CDが発売され、オーディオ界に大きな技術のパラダイム・シフトが起こった。やがて、多くの会社がアナログからデジタルに大きく舵を切り、既に真空管(球)からトランジスタ(石)へと転化していたアンプの世界もその動きを一段と加速していった。

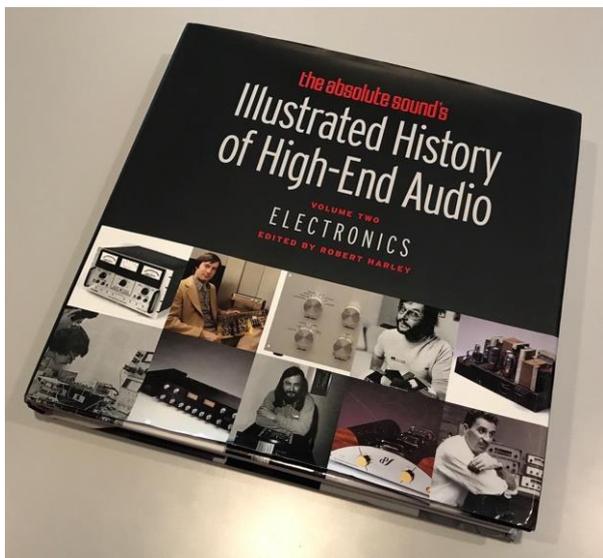
1986年、三浦氏は自身の夢であった真空管を用いた「拘りのオーディオ機器」の開発を目指し、新たにエイ・アンド・エム(A & M)株式会社を設立する。その決意を固めたのは「筋の通ったものを作りたい」との思いと「アンプを作るには真空管に勝るものはない」という信念であった。

ソウル・マランツ氏からは、もしオーディオ業界で起業するならば「大いなる情熱と限りない資金が必要」とのアドバイスを受けていたが、三浦氏は「自分に資金はほとんど無いが、情熱だけは誰にも負けない」と応じた。その決意を聞いたマランツ氏は「今から真空管アンプで起業するならそれを貫け」とエールを送ってくれた。

A & M という会社名は、海外での展開を考えたとき A というアルファベットのトップから始まる名前ならば、ショーなどのカタログ上でトップに記載されること、目立つことなどの理由の他に自分の名前の「篤」(A)と奥さまの「まり」(M)からとのこと。さらにブランド名の AIR TIGHT も真空管アンプをイメージできる秀逸な名称といえよう。ここにも三浦氏の人柄が表れている。

海外にも多くの知古を持つ三浦氏は自分の作る真空管アンプを全世界に向けて販売している。そこには氏の「どんな難しいスピーカーも鳴らしてみせる」との自信とチャレンジ精神があった。氏自ら AIR TIGHT のアンプを持って海外の販売店に出かけ有名高級スピーカーを次々に鳴らして見せたのである。「情熱だけは誰にも負けない」まさにその実践であった。地道な販売活動であったが AIR TIGHT と Mr. Miura の名前はハイエンド・オーディオの世界で着実に根付いていった。欧米での AIR TIGHT の評価が我が国のそれより高いのは、自分たちの耳を信じ「論より証拠」を尊ぶ海外ならではのよう。

一昨年、三浦氏の下に素晴らしい朗報が入った。それは米国の権威あるオーディオ雑誌 The Absolute Sound 誌の「HALL OF FAME AWARD」受賞である。この名誉ある賞の受賞者は日本人としては二人目の快挙と聞く。そして、同誌発行のバイブルとも言える「Illustrated History of High-End Audio」にも AIR TIGHT が取り上げられ Japanese Contribution のカバーページ写真を飾っている。

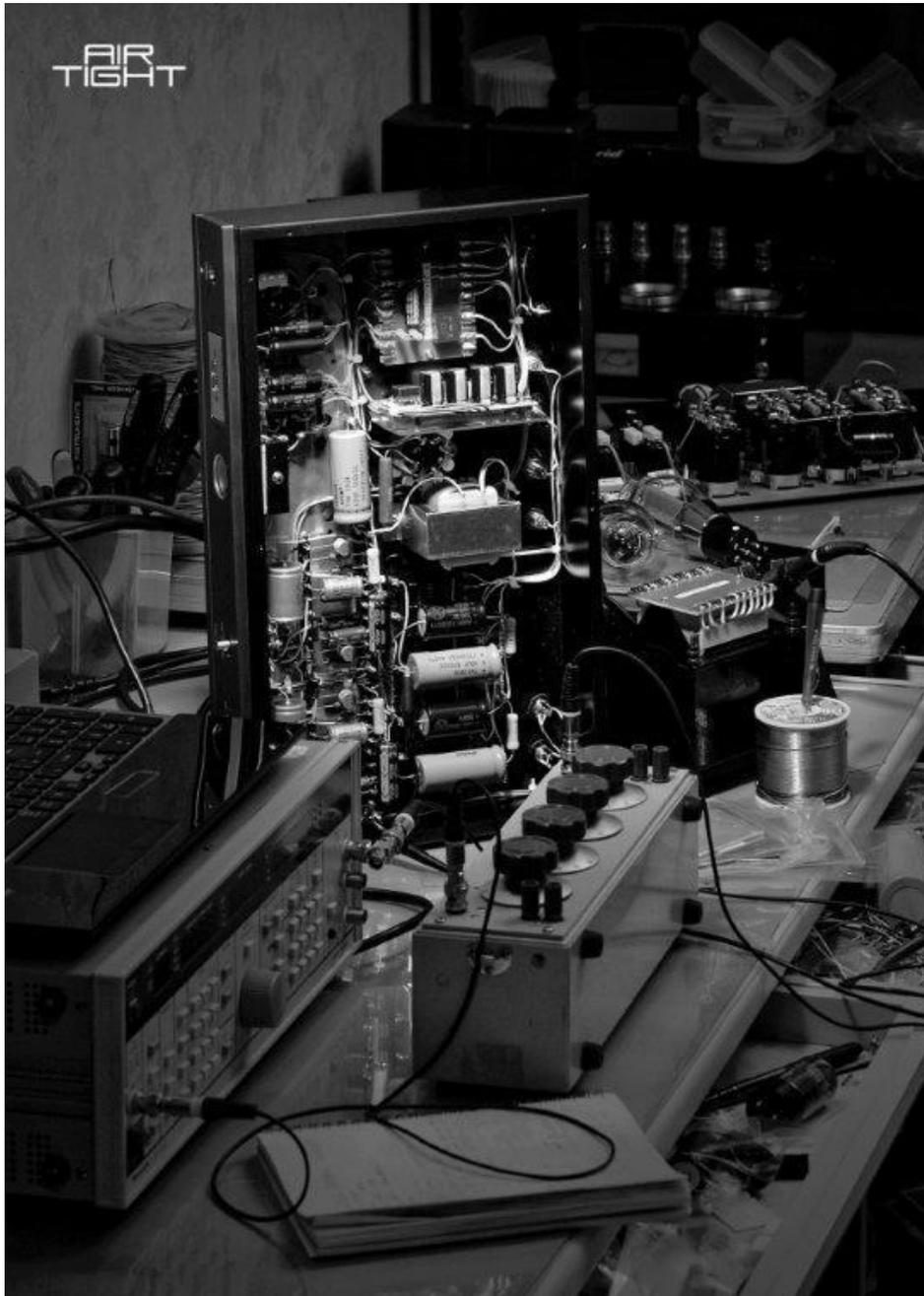


AIR TIGHT の真空管アンプは米国 Absolute Sound 誌発行の Illustrated History of High-End Audio II (電子機器編)に取り上げられた

これからは真空管のキット、それも信頼性のある本物を作りオーディオを目指す若い人々に「本物とは何か」を伝えていきたい。三浦氏の次の夢である。

幼いころ野球の球を追いかけた少年は今、真空管という球を追ってさらなる高みをめざしている。回路図では表せないアンプの魅力を今後どのように表現してくれるのか、「正直 60 年かけて

やってきてもまだその道が見えていない」こう謙虚に振り返りながらも三浦氏の眼は輝いていた。



A & M 社の実験室のような製造現場、ここで AIR TIGHT 製品が一台一台丁寧に組み立て調整されている

(文責 森 芳久)